只見短歌会　九月詠草

大塚栄一　指導

久びさにこほろぎの声厨まで灯りを消してしばし佇む　馬場　八智

只見での在職中は温かき多くの人に感謝しきれず　飯島小百合

見学のバスに乗りつつ雄大な山間抜ける八十里越　関谷登美子

病院にて同級生と久に逢ひ長病む夫の介護愚痴合ふ　渡部ゆき子

先輩の歌集を読みてわが未熟ことさら思ふ秋深き夜に　新国由紀子

花殻を摘みし効果か白桔梗季節外れに未だ咲きつぐ　目黒　富子

秋晴れにひと日稲刈りつくづくと歳追ふごとに身体疲るる　渡部ヨリ子

秋祭り心はづみて家の前子供みこしに手拍子送る　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　十月例会

目黒十一　指導

顔出せば香り部屋充つ茸飯　一穂

秋仕舞切るには惜しい葉鶏頭

秋の田に蟻のごとくにウォーキング　信

病む友の声密やかに秋の暮れ

秋空や村すっぽりと包みおり　修一

鍬の音しずかに続き秋近し

秋彼岸ついロに出すヨッコラショ　都

声かけて声かけられて稲田道

亀虫や気配を察し歩み止め　敦子

あるじなき庭に咲きおりわすれな草

闇夜にも白き景色のそばの花　味代子

夜長かなまた一冊を読み耽る

青空や馥郁として綿の花　吉児

送迎車下りるに釣瓶落しかな

つるもどき夫の手たわわ畑みやげ　弘子

夕霧や吸われる如く友逝きし

あきつしま台風遅速ありにけり　幸生

浅漬けを食む音ふたり秋深む

水音の届く限りを葛の花　礼

午後の日に均し返せり豆莚